

ホームページに世界の大学戦略を見る

(32) 大学ランキングを意識したアジアの大学の動向

# 大学ランキングと ワールドクラス・ユニバーシティ

山田礼子 同志社大学教授

本連載でもグローバル化という現象が進行するなかで、世界の大学がいかに留学生を確保しているか、ラーニング・アウトカムをどう測定し、獲得させようとしているか、異文化・多文化の知識や体験を促進するためのスタディ・アブロードが充実している実情、および海外でのブランチ・キャンパスの設置等の動向を紹介してきた。今回は、過熱化するランキング競争を意識した世界の大学、そのなかでも特にアジアの大学の動向について紹介してみよう。

7月26日版の朝日新聞に、世界の大学ランキングに関する特集記事が掲載されていた。編集委員の山上氏によると、「『世界の大学ランキング』への視線が熱い。英語圏の大学が有利になる傾向に反発して一定の距離を置く大学があれば、あえて流れに乗って躍進を目指す大学も」あるとのことだ。一連の大学ランキングにおいては、研究指標のみならず、国際化もキーワードとなるために、研究、教育面での国際化に重点を置く世界の大学も増加している。日本のグローバル30プログラムも実際には、こうした国際化を軸とする大学ランキング競争と無縁ではない。

先日ある国際会議で欧米の研究者、東アジア、東南アジアの研究者と議論する機会があったが、その際、アジア圏の研究者の多くが、世界大学ランキングやアジア大学ランキングを強く意識し、ワールドクラス・ユニバーシティを目指して国際化を軸としてランキングを上げることを戦略としていることを認識した。大学ランキングを意識し、積極策を取っている大学は、欧米圏以上にアジア

圏の大学に多いことが興味深い。

## THEと上海交通大学のランキング

それでは世界の大学ランキングを巡る状況はどのようになっているのだろうか。

ランキングが強く意識されるようになった背景としては、グローバル化、知識基盤社会、人材育成といった用語がキーワードとして挙げられるだろう。グローバル化が進化するなかで、知識や人材を巡って国際的な競争が熾烈になってきている。そうした環境のなかで、いかに、世界の大学は、ワールドクラスの研究拠点や国際化を進展させるかということに必死になっているというわけだ。

現在、大学ランキングは、世界の大学ランキング、アジアの大学ランキング、アメリカの大学のランキング、イギリスの大学のランキング、オーストラリアの大学のランキング、カナダの大学のランキング、ロシアの大学のランキングのように世界、アジアといった大規模なものから、一国の中での大学ランキングなど多様なランキングが存在している。

世界の大学ランキングでは、「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション (THE)」と「上海交通大学」による大学ランキングがよく知られている。THEは、新聞というメディアによる大学ランキングであるゆえに、その広報のノウハウを武器に、2004年のランキング発表以来、多くの一般読者をひきつけている。留学を目指している学生にとっても、THEのランキングは志望校選択の重要な情報源となっている。

それだけでなく、論文の被引用件数などが評価指標として挙げられていることから、世界中の研究者が参照している。

THEは大学機関と学問分野毎のランキングを実施している。その際の評価となるデータについて、2009年度版を参照してみると、「研究者によるピア・レビュー」、「採用者側のレビュー」、「論文の被引用件数」、「外国人教員比率」、「留学生比率」、「学生と教員比率」となっている。研究者によるピア・レビューが40%、採用者の評価が10%、学生と教員比率が20%、所属大学教員の論文の被引用件数というパフォーマンス評価20%、外国人教員比率5%、留学生比率5%で合計100%になるように設定されている。THEのランキングは、2010年から学術情報リサーチ会社であるトムソン・ロイターと提携することにより、評価指標を上記の6項目から研究の質、大学の組織力、経済活動等を評価するために、13まで増加することになっている。

上海交通大学によるランキングは、大学内にある高等教育研究所が研究を目的に行っているランキングで、世界のトップ大学500を対象としている。ノーベル賞、フィールズ賞受賞数や、論文の引用数など研究パフォーマンスに重きをおいており、自然科学系・英語圏の大学への偏りが従来から課題と指摘されてきた。

上海交通大学によるランキングは、中国の大学がワールドクラス・ユニバーシティを目指すというグローバル化に対応した戦略を立てるため、あるいは立てたことが背景にあるともいわれている。実際に、多くの世界の大学は、現在、このランキングを意識して、大学の戦略を立てているといっても過言ではないことは先述したとおりである。戦略の代表例が、「世界的研究拠点の形成」と「国際化の進展」であろう。

## 国際化に向けたアジアの大学の取組み

### ・研究拠点大学へ——浦項工科大学

韓国の浦項工科大学の例を示してみよう。POSTECという名称で知られている浦項工科大学の設立は1986年と歴史は浅い。設立当初は浦項製鉄が運営に参画していたが、現在は直接の経営には関係していない。しか

し、設立にあたって、浦項製鉄の会長が米国のカリフォルニア工科大学を訪問し、韓国にもカリフォルニア工科大学のような大学を設置することを決意し、イギリスに在住していた著名な物理学者の金博士を学長として招聘した。金学長の人脈をもとに、欧米を中心に在住している韓国系の著名研究者を集めて、浦項工科大学がスタートした。初めての新生募集にあたっては、大学修学能力試験の成績を上位24%以内と高く設定することにより、優秀な新生の獲得に成功し、ソウル大学と並ぶレベルの大学としての地位が定着した。現在は、ワールドクラス・ユニバーシティを目指すという標語を掲げて、理工系を中心とする研究拠点の形成を積極的に進めている。設立からわずか20年余りで、研究拠点大学としての名声を得るようになった要因は、初代学長を始め、海外で活躍する韓国系の研究者を多く呼び戻して世界的な研究を推進できる体制を整えたことが大きい。現在でも継続的に欧米に移住する韓国人はかなり多く、韓国語を話せる韓国系米国人の2世の数も多い。米国や南米に移住した日系人が既に4世や5世となっていることから、言語だけでなく、父祖の祖国である日本に対するなじみが薄くなっている日系人と日本との関係と比較すると、母国である韓国へのなじみも深い。そうした韓国系研究者を良い条件で獲得すれば、一挙に研究も国際化も促進するというわけである。

### ・国際的な質保証目指す台湾の大学

他の東アジアの国はどうだろうか。台湾の大学は1990年代以降、急速に質の保証とグローバル化の進展に合わせ、国際的にも通用する大学を目指して改革を進めているという。2005年には高等教育評価機関が設立され、5年間での500億エクセレンス・プログラムが発足した。このプログラムは、日本のグローバルCOEやグローバル30プログラム、あるいは韓国のブレイン21プログラム、中国の985エクセレンス・プログラムと同様に、国際化をキーワードにワールドクラス・ユニバーシティ計画を推進するという内容である。

台湾の高等教育に限らずアジアの大学が国際化を進展させていくには、1) 世界中から有能な研究者をリク

ルートする、2) 学士課程と大学院両方において英語による授業を増加させる、3) 学生や教員の国際間での流動化を進める、4) 研究やカリキュラム面において、外国のパートナー大学との連携を推進するといったことが共通の戦略である。台湾は、国際化を進めていく上で、国際的な評価機関の認証を受け、国際的に質の保証が認知されているという事実を広報することで、留学生を増加させるという方向性を実践している。台湾では、高等教育機関は、高等教育評価機関による評価が義務づけられているが、ワールドクラス・ユニバーシティを目指すという国家戦略が明らかになって以来、国際評価機関の評価を受けた高等教育機関は、国内の高等教育評価機関による評価が免除されるようになった。その結果、工学系、ビジネス系のプログラムが国際評価機関の評価を積極的に受けるようになってきている。そのメリットは、外国の機関との合同プログラムを設置しやすいこと、その結果として留学生をより多く引きつけられることであるという。

Fu Jen Catholic大学も、世界大学ランキングを強く意識して、そうした国際的な認証機関の認証を受信することを旨とし、国際化を進展させている大学のひとつである。

[http://140.136.240.107/english\\_fju/](http://140.136.240.107/english_fju/)

Fu Jen Catholic大学の学生数はおよそ2万6000人、専任教員数が760人である。9学部があるが、そのうちのひとつにマネジメント学部がある。マネジメント学部は、5つの学士課程の学科、6つの修士プログラム、そして7つのエグゼクティブ修士プログラム、一つの博士



[http://140.136.240.107/english\\_fju/](http://140.136.240.107/english_fju/)

プログラムから成り立っている。まだ正式な認証評価を受けているわけではないが、AACSB(The Association to Advance Collegiate Schools of Business)による認証を目指して着々と準備を進めている。具体的には、9カ国の28大学の学部と提携や交流締結を行い、在籍している留学生の22.3%がマネジメント学部で学んでいる。また英語による授業数も年々増加している。

・中国・シンガポールの動向

もちろん、中国の大学やシンガポールの大学も積極的な国際化政策を推進していることはいうまでもない。中国では、外国人研究者や教員の招聘を行うにあたって、給与水準が課題となってきたが、現在多くの大学が様々なボーナスを付与することで、外国人教員を招聘する条件の向上に取り組んでいる。

シンガポールの大学は、公用語が英語であることが、国際化を進展させていくうえで、有利な立場にある。つまり、英語での授業の提供、研究拠点の形成をするうえで、欧米圏の研究者を招聘しやすいからだ。そのような状況がTHEのランキングにおけるシンガポールの大学の高い順位を反映しているといえよう。

・マレーシアのエクセレント大学ランキング

アジアの大学では、韓国、中国、台湾、シンガポール、そして日本等東アジア圏に位置する高等教育機関が国際化を通じてのワールドクラス・ユニバーシティを目指し、ランキングを上昇させようという傾向が一步進んでいるようだが、それでは他のアジアの状況はどのようなものだろうか。ここで、マレーシアの状況を見てみよう。

以下のサイトではマレーシアにおける大学ランキングの公表が掲載されている。

<http://thestar.com.my/education/story.asp?file=/2010/7/18/education/6667779&sec=education>

今回公表されたランキングは、かならずしも順位によるランキングではなく、Tier FiveからTier Oneまでの大学の機能別ランキングというイメージに近い。そしてTier Fiveはエクセレント大学として定義されている。マレーシアでは長い間、ランキングの公表が待たれていたという。ようやく実現したマレーシアのエクセレント



<http://thestar.com.my/education/story.asp?file=/2010/7/18/education/6667779&sec=education>

大学ランキング(Tier Five)にリストアップされた18大学のうち7大学が公立機関で、残りの11校が私立大学となっている。

今回のランキングの評価指標では、大学でのティーチングとラーニングが重要視され、研究や社会貢献については評価指標が使われていなかったため、将来的には研究と社会貢献を評価指標として使うことが予定されているという。また、表に掲載されている大学の中には、オーストラリアのモナシュ大学のクアラルンプール校やイギリスのノッティンガム大学のマレーシア校など外国大学のブランチ・キャンパスの名前が挙がっていることが興味深い。近年、マレーシアにおいても、急激に高等教育への進学者数が増加してきており、国内の需要に国内の大学だけでは追いつかないという状況がある。そのため、外国大学がブランチ・キャンパスを設置して、増加する学生を吸収しているが、一方で、外国のブランチ・キャンパスを設置することは、国際化を進める戦略の一つでもある。

外国大学のブランチ・キャンパスには様々な形態がある。自国に設置されている外国大学のブランチ・キャンパスだけの学習を通じて学位が授与される形態、ブランチ・キャンパスでの学びと本国でのキャンパスでの留学での学びを合わせて学位が授与される形態などである。しかし、いずれにしても、ブランチ・キャンパスでの授業形態は、本国の授業と同様の内容で行われる場合

には本国の言語で提供されることも多く、ブランチ・キャンパスの設置によって、国際化が進展するということがメリットのひとつである。それゆえ、今回のランキングにおいては、モナシュ大学のブランチ・キャンパスや、ノッティンガム大学のブランチ・キャンパスなど、教育機能を重視している外国大学がリストアップされたともいえるだろう。

さらには、今回のランキングの実施と公表は、マレーシアにおいても、質の保証という問題が、グローバル化の進展に合わせて重要な課題となってきていること、評価が、機関への資源配分に対して、重要な意味を持ち始めていることを示している。特に、公立大学への資源配分に対して、社会からのアカウンタビリティが求められるようになってきていることも関係している。つまり、今回、エクセレント大学(Tier Five)としてランクされた大学は、マレーシア政府によるグラント獲得に有利になると同時に、研究大学として活動していく土台を固めることにも利用できるという。また、政府の公立大学への財政配分も、今回のランキング結果を参考にしていく姿勢が実際に首相によって表明されている。今回の公表結果によって、Tier Fiveとしてリストアップされた大学の学長の多くは結果を好意的に受け止めており、例えば、Universiti Malayaの学長は、「今回の結果は、今後、研究大学として世界ランキングに対応していくために、よりバイオやナノテク分野の重点化を進めていく基礎となった」と語っている。同様に、テイラー大学カレッジの副総長も、「今回の結果は、我が大学にとっても快挙であり、学生にグラントがつくこと、そして研究資金がより配分されるというインセンティブは将来にとっての大きな励みとなる」と語っている。エクセレント大学としてランクされた大学からのコメントのみで、Tier Oneにランクされた大学がどうランキングを受け止めているかについて知ることができないのは残念であるが、いずれにしても、ランキング競争が世界の多くの大学を巻き込みつつあることは否定できない。こうした競争に積極的にかかわっていく、あるいは距離を置くといった選択をするにあたって、自らの大学の使命と将来像をしっかりと把握することがこれまで以上に重要となっているといえよう。